



昭和60年頃



現在の矢板市内の様子

特集 G O G O 55 やいた

昭和33年11月1日、矢板町、泉村、片岡村の3町村が合併し、矢板市が誕生しました。そして、今年で市制施行55周年を迎えることができました。

55年の歩みを顧みると、色々なことがありましたが、市民の皆さんの力に支えられ、ここまで成長をすることができました。

この間には、高度経済成長期の時代背景により、交通網の整備や施設の建設をはじめとする生活の基礎を支える施策に力を入れてきました。

しかしながら、今、時代の潮流は以前とは向きを変え、少子高齢化の進展や低成長時代を迎えたことにより、行政運営のあり方を、根底から見直さなければいけない時がきています。

このような時代だからこそ、先達のためまぬ努力と英知に感謝し、これまでの55年間の歩みを振り返りながら、新たなことに挑戦し、飛躍していくヒントを模索していかなくてはなりません。

今号では、そんな55年を写真で振り返るとともに、矢板市出身で最もG O G Oな人、柿沼康二さんにお話を伺いました。

写真で振り返る矢板市 55年 間のあゆみ



昭和38年 市庁舎落成



昭和55年 栃の葉国体



平成10年 市制40周年



昭和39年ころ 矢板駅前



昭和43年 市制10周年



昭和34年ころ 東武矢板線

- 昭和33年(1958年) 11月 市制施行 祝賀式典開催
- 昭和34年(1959年) 5月 東北本線上野～黒磯間電化
- 昭和35年(1960年) 9月 第一回市民体育祭
- 昭和38年(1963年) 4月 市庁舎落成
- 昭和40年(1965年) 矢板工業団地造成着工
- 昭和42年(1967年) 4月 矢板市体育館完成
- 昭和48年(1973年) 8月 東北自動車道岩槻～矢板間開通
- 昭和49年(1974年) 12月 東北自動車道矢板以北が開通
- 昭和52年(1977年) 6月 市の花・木・鳥制定
- 昭和53年(1978年) 8月 市制20周年記念/矢板市の歌、市民愛唱歌制定
- 昭和54年(1979年) 11月 矢板公民館完成 12月 市立図書館完成
- 昭和55年(1980年) 7月 茨城県笠間市と姉妹都市提携盟約式 10月 栃の葉国体秋季大会少年サッカー競技会開催
- 昭和56年(1981年) 5月 文化会館落成記念式典
- 昭和57年(1982年) 5月 全国植樹祭開催
- 昭和63年(1988年) 11月 市制30周年記念事業「矢板市市民の日」制定
- 昭和63年(1988年) 7月 日本の都市公園百選に長峰公園認定
- 平成元年(1989年) 7月 市民の日マスコット「ポッポちゃん」決定
- 平成3年(1991年) 11月 市の湯温泉センター1号館オープン
- 平成4年(1992年) 4月 城の湯温泉センター1号館オープン
- 平成5年(1993年) 8月 全国高等学校総合体育大会サッカー競技開催
- 平成7年(1995年) 10月 第10回国民文化祭・栃木'95開催



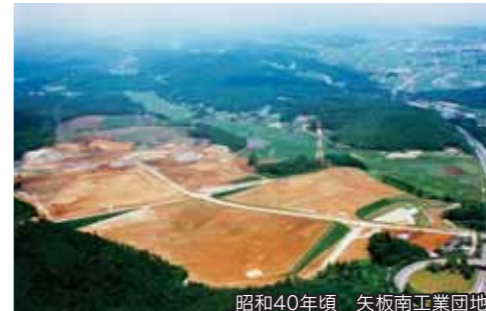
昭和43年 矢板ハイパス全面開通



昭和49年頃 東北自動車道矢板IC



昭和53年 市制施行20周年記念事業



昭和40年頃 矢板南工業団地



平成10年 災害



平成23年 東日本大震災

- 平成8年(1996年) 10月 第20回全国育樹祭開催
- 平成10年(1998年) 8月 局地的豪雨(市初の避難勧告) 11月 市制40周年記念事業
- 平成11年(1999年) 9月 南工業団地進出第1号企業、(株)香屋の工場完成
- 平成12年(2000年) 2月 第1回ともなり文芸祭り開催
- 平成14年(2002年) 中華人民共和国浙江省湖州市徳清県と友好交流協定に調印
- 平成15年(2003年) 5月 山の駅たかはらオープン
- 平成20年(2008年) 11月 市制施行50周年記念事業
- 平成21年(2009年) 3月 日新小学校・長井小学校・上伊佐野小学校閉校式 12月 環境都市を宣言
- 平成22年(2010年) 道の駅やいたエコモデルハウス落成 11月 「ともなりくん」誕生
- 平成23年(2011年) 1月 やいたブランド認証式～第1回～ 3月 東日本大震災(3.11)～震度5強を記録～ 都市計画道路 木幡通り開通 4月 矢板市さすな館開館～地域福祉活動の拠点施設～ 道の駅やいたオープン 11月 まちづくり基本条例施行
- 平成24年(2012年) 2月 とちぎ花フェスタ2012inやいたを開催 4月 郷土資料館オープン 9月 環境省から放射性物質汚染指定廃棄物最終処分場の建設候補地が矢板市になったことが伝達～矢板市塩田字大石久保の国有林野～



©Shoichi Nose

柿沼康二氏 特別インタビュー

市制施行55周年を迎えた矢板市。これからはますます発展していくために更なる挑戦と努力が必要だ。そのヒントを求めて、今回は矢板市出身で世界を舞台に活躍する第一回市民栄誉賞受賞者で「書家」の柿沼康二さんに話を聞いた。柿沼さんは、現在、日本を代表するコンテンポラリー美術館「金沢21世紀美術館」での個展を前に、準備と矢板市での制作活動に取り組まれていた。著名になっても立ち止まることなく、今なお新しいことに挑戦し続けているその生き方を伺った。

大作を矢板で制作しようと思ったのは？
もちろん、これだけの大作を書くことができる会場があまりないことありますが、ほかの場所だと親近感がまったく湧かない。生まれ育ったふるさとであるし、この体育館の道理も解るし、思い出もあるし、色々ご協力もいただける。

矢板は、自分にとって「ホーム」で親しみが持てる場所であるし、作品にも反映されま

今回の作品に込めた思いは？

今回は、11m×7.5mと7m×12mの2作品をこの会場で作りますが、書を逸脱した「アート」以外のなものでもありません。今までの作品の中で一番パワフルなものになりますし、今回の展示の中でも、構成上の見せ場で、もっともハイパーテンションなものになるでしょう。それを矢板で作ります。おそらく、日本で、いや世界でもこれだけの大作はないでしょうね。

「書はアートたるか、己はアーティストたるか」が信条と聞きましたが？

書は日本の伝統でもあり、世界的なアート

にもなる。20代の頃から、これに挑戦し続けています。今回の作品も紙や墨にこだわらなくてもいいのですが、あえて使います。

普通はこんなこと誰もやらないと思います。場所や手間、道具などを考えたらやらないですね。でもそこに挑戦したい。

「今に生きている文化としての書表現したい」と聞きましたが？

書はなんといっても「ライブ感」を出せるのです。その瞬間の呼吸や動作までも作品に出すことができます。はじけ飛んだ墨や破けた半紙、転んだ跡、まさしく呼吸や動作が作品に現れます。毎回大作を書くときは、精根尽き果てますが、毎回、限界を突破することが大切だと思います。

空海の「風信帖」を常々書いていると聞いていますが？

書の原理を使いながら、色々な作品を作りたいと思っています。そのためには基本となる原理を学ぶことは必要です。ベースとなるものは書の古典だけでなく、音楽や映画などの世界観を書のフィルターを通じて墨と紙、そして言葉で表現していきたいですね。

最後に矢板の未来を担う子どもたちにメッセージはありますか？
できるだけ「本物」を感じて欲しい。書でも絵でも音楽でも生のものに触れて、見て、感じる心が心を育てるうえでとても大切なことではないでしょうか。

今の時代は、ファスト文化に代表されるように無駄の少ない平均的なものに均すことが良いこととされているような気がしますが、本物には、無駄があふれています。無駄なことを積み重ねて積み重ねて、その頂に立つことができる。それが個性であり自分という存在なのです。もっと自信を持って「自分」を持つてほしいですね。

柿沼 康二氏 Profile
1970年栃木県矢板市生まれ。
5歳より筆を持ち、柿沼翠流(父)、手島右脚、上松一条に師事する。
東京学芸大学教育学部芸術科(書道)卒業。
2006-2007年、米国プリンストン大学客員書家を務める。
2012年春の東久邇宮文化褒賞、
第1回矢板市民栄誉賞、
第4回手島右脚賞、独立書展特選、
独立書人団50周年記念賞、
毎日書道展毎日賞(20代で2回)
など受賞歴多数。



©Shoichi Nose

半紙に「文字で夢や希望を表現する」「文字書道コンクール」を行っているという聞きましたが？
父・翠流が中心となりやっておりすが、まずは子どもたちの自由な表現力を大切にしたいと考えています。
私たちが見るとお手本を見て書いたものかどうかがはっきりとわかります。そういった規制の枠にとられずに、その子の呼吸や筋肉の動き、すなわち「個性」を好きなように自由に「文字で表現して欲しい。そんな願いがあこのコンクールには込められています。

ちがまったくないのに、たまたま勝っても、それは違うと思います。
腹の底からである思いを正直に表現した

座右の銘が「勝ってもおごらず、負けてもめげず、無駄は無駄じゃない」とお伺いしましたか？
20代の頃からずっとその思いは変わっていません。無駄をなくすほど、人を感動させられないと思います。一般の人が「これやらないよ」という所に人を感じさせる要素がある。やってみて駄目ならいいけど、勝手に自分に限界をつくってやってもないのに無理だよと諦めるのは良くない。

親も子どもの限界を作りがちなのではないか。その子が本心で無駄と思ってい

なければ、まわりで決めるべきではないし、いずれその子の個性の発見につながると思います。やはり一番大切なのは、自分の腹の底からである思い。例えば、サッカーの試合でも心の底から勝ちたいと思っ

誰のために作っているわけではない、自分の作った証を残したい。人がいかに評価してくれても、自分で納得しなかつたら負けですから。そんなことをこの言葉から考えています。



©Shoichi Nose

柿沼康二 書の道 [ぱーっ]
会場/金沢21世紀美術館 展示会ゾーン
開催期間/11月23日(土)~平成26年3月2日(日)
開館時間/10:00~18:00(金・土曜日は20:00まで)
※1月2日・3日は17:00まで
休場日/月曜日
(休日の場合はその直後の平日。ただし2月10日は開場)
※12月29日(日)~1月1日(水)は休み
料金など詳細については、ホームページをご覧ください。
金沢21世紀美術館ホームページ [HP http://www.kanazawa21.jp/index.php](http://www.kanazawa21.jp/index.php)